

【紹介】

Ayami Nakatani ed.

*Fashionable Traditions: Asian**Handmade Textiles in Motion*

(邦訳：中谷文美編『ファッショナブルな伝統——アジアの手仕事による染織品の動態』)

Lanham: Lexington Books, 2020 年刊
305 頁、115 米ドル国際ファッション専門職大学
金谷美和

国際的な文化人類学の共同研究の成果である論文集について紹介したい。私自身も寄稿しているため、書評ではなく紹介としたい。この本の対象となっているのは、アジア諸国の手仕事によって製作されているテキスタイル（「布」、「染織品」と訳すこともできる）である。それらのテキスタイルは、地域や民族の生活文化や社会関係に根ざしており、衣装や寝具などの生活用具として、あるいは宗教儀礼布などとして使われてきた。また、地域特有の材料を用いて、その材料に適した技術によって製作されてきたものが多く、固有の製作技術を保持してきた。

近年、アジアの手仕事によるテキスタイルへの関心は高まっている。グローバル化の進展とともにローカルなものも価値が認識されている。ファッションの素材として民族的な意匠が注目されるなど、文化や伝統に根ざしたテキスタイルはグローバル市場において商品価値を持つようになっている。また、ファッションのサステナビリティへの傾斜のなかで天然繊維や天然染料による染織技術を製作にとり入れるアパレルブランドも現れている。

この本は、そうしたアジアの手仕事によるテキスタイルに対するグローバルな潮流を背景にしているのであるが、その論調はグロー

バル化がもたらす事象への賛歌ではない。

編者の中谷文美は、アジアのテキスタイルのグローバル化現象について東京での経験を記している。日本のある大手小売企業の企画に、世界各地の手仕事を紹介しつつ、その伝統を生かした商品を日本で販売するというものがある。中谷は、その企業によってインドのグジャラート地方で製作された商品を見て、「これらのものは、文化的、物理的な距離を超える過程で、オリジナルのもっていた色鮮やかで手の込んだ文様表現が次第にはぎとられてしまったようであった。そこに残されていたのは、伝統というあいまいな感覚によってファッション化された手仕事のイメージだけであった。」と辛らつに指摘した後、「この本のねらいは、この種の現象に抗うことである。」と述べている（13 ページ）。

つまり、アジアのテキスタイルが、グローバル化の進展のなかのように継承され、変化を遂げてきたかがこの本の問いであり、執筆者たちはその問いに向き合ってアジアのテキスタイルの動態を明らかにしている。

執筆者全員が文化人類学者もしくは文化人類学に隣接する領域の専門家である。グローバル化に巻き込まれた諸現象を、生産、流通、消費の現場に潜行してつまびらかにしているのであるが、文化人類学的なフィールドワークをもって初めて可能になる領域であろう。この本の対象地域とテーマのひろがり、以下の目次のとおりである。

Introduction: Asian Handmade Textiles as Fashionable Traditions

Ayami Nakatani

Part 1: Fashion Dynamics in Tradition

1. Ikat Patterns in Flores, Indonesia, and the Global Fashion Trajectory
Willemijn de Jong
2. “New Style” of Ethnic Clothing: Dress between Tradition and Fashion among the Hmong in Yunnan, China

- Chie Miyawaki
3. The Pashmina Shawl: Continuity and Transformation from Ladakh to Kashmir, North India
Monisha Ahmed
Part 2: Politics of Heritage and Beyond
4. Listing Cultures: Politics of Boundaries and Heritagization of Handwoven Textiles in Indonesia
Ayami Nakatani
5. Between Culture and Technology: Theme Saris and the Graphic Representation of Heritage in Tamil Nadu, India
Aarti Kawlra
6. "Heritagization" as a Double-Edged Sword: The Dilemma of Nishijin Silk Weaving in Kyoto, Japan
Okpyo Moon
7. Inheriting Weaving Knowledge in Depopulated Communities: Conservation of Wisteria Fiber Textiles in Kyoto, Japan
Miwa Kanetani
Part 3: Contested Valorization and the Role of Mediators
8. Branding Tsumugi Kimono in Japan: Kimono Magazines as Mediators between Consumers and the Mingei Movement
Seiko Sugimoto
9. "Crafts" to "Art"? A Trajectory of Aboriginal Women's Weavings in Arnhem Land, Australia
Sachiko Kubota
10. Translocal Ikat in Contemporary Bali, Indonesia: Imagining Heritage, Imagining Modernities in Ikat Production and Marketing
Susan Rodgers
Part 4: Ambivalent Encounters with Global Consumers
11. Embroidering Development: The Mutwa and Rann Utsav in Kutch, India
- Michele A. Hardy
12. Strategic Choices of Techniques: Dyed and Printed Textiles for Goddess Rituals in Gujarat, Western India
Yoko Ueba
13. Patchworking Tradition: The Trends of Fashionable Carpets from Turkey
Ulara Tamura
14. What Do Handwoven Textiles Do? Constellation of Things and the Primal History among Non-Weaving People in Flores, Eastern Indonesia
Eriko Aoki

日本、韓国、中国、トルコ、インド、インドネシア、オーストラリアの事例が論じられている。それぞれの場所において固有で多様な現象が発生しているのであるが、それらを貫く共通の事象があることも示されている。伝統衣装のファッション化現象、文化遺産化、仲介者による価値の創出、そしてグローバル市場への接続である。

共通の事象は、各執筆者の研究をよせあつめただけでは、おのずと明らかになるものではない。研究会や現地調査、国際会議での討論をとおして、議論が積み重ねられたことによって浮かび上がってきたものである。共同研究を可能にしたのは、科学研究費による研究助成¹⁾であり、本書はその成果でもある。この共同研究には、日本から11人、韓国から1人、インドから1人参加した。オーストラリアのアデレードで開催されたアジア研究者会議 (ICAS)、カナダのバンクーバーで開催された国際人類学民族学科学連合国際会議 (IUAEC)、京都で開催されたシンポジウムには、メンバー以外にオランダ、インド、カナダ、韓国、アメリカから発表者が参加した。

各自が自分のフィールドをもって研究をすすめてつ、それぞれの現場で生じている染織品の生産、流通、消費にかかわる事象を共通

の土台で議論するための工夫がおこなわれた。年に数回開催された研究会や、テキスタイルの生産現場における共同調査（ブータン、インドネシアのティモール島、沖縄県）において議論は深められた。この種の論文集は、共同研究の場を作り、成果までまとめあげる研究代表者（编者）の手腕なくしては実現しない。そのため、この本は共同研究の方法や成果の出し方についても示唆を与えてくれる。

日本は、手仕事によるテキスタイル生産の豊かな伝統を継続させている世界にもまれな国である。また、テキスタイルの愛好家が多いため、アジアのテキスタイルにとってグローバルな連関をもつ市場のひとつである。海外において日本の文化人類学者を中心としたテキスタイル研究に対する関心は非常に高いため、英語で出版されたことの意義は大きい。

<注>

1) 科学研究費基盤研究 (A) (一般) 「アジア地域における布工芸品の生産・流通・消費をめぐる文化人類学的研究」平成26-29年度 (代表 中谷文美) (課題番号 26244053)。

山縣良和+ writtinafterwards 企画・構成 『アイデア No.390 writtinafterwards 装綴』

誠文堂新光社、2020年刊
216頁、2829円+税

国際ファッション専門職大学
平野 大

今回、雑誌『アイデア』を企画・構成したのは、デザイナーの山縣良和である。山縣

は、セントラル・セント・マーチンを卒業後、writtinafterwards を設立し、以後精力的にクリエイション活動を行っている。また2008年には「こののがっこう」を立ち上げ、数多くの若手クリエイターたちを輩出している。

本誌の編集は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下の時期に行われた。そのこともあり、本誌で山縣は、新型コロナウイルスとファッションは如何に向き合っていくべきかという切実な課題に取り組もうとしている。

すでに多くの問題を抱えていたファッション業界にコロナ禍が追い打ちをかけた。それによりファッション業界の今後の見通しは、より不透明なものとなっていった。山縣は、本誌の中で、ファッション史の流れを追いつつ、現在の疲弊しきったファッション業界の未来と希望を必死に模索していこうとしている。寄稿者たちも山縣のこうした想いに共鳴しながら文章を綴っている。

緊急事態宣言が発令され「進めていた仕事の延期や中止の連絡が次々と来るようになった」(本書、147ページ)中、山縣は、「自ら蚕を育て、日々を記録していくこと」(147ページ)を思い立つ。それは、ファッションや衣服の起源にこだわる山縣らしいアイデアの発露であった。山縣は、「ファッションの創造の起源を見つめよう」[山縣・坂部2013: 79]とし、「神々のファッションショー」と題したコレクション(2010年春夏)で「遠い昔、この世界で初めてファッションショーを行ったのは神々だった」[山縣・坂部2013: 78-79]というコンセプトでショーを行う。また2011年10月に開催されたグループ展「感じる服 考える服：東京ファッション現在形」で「あたらしいせかいのちつじょ～動物たちの恩返し」と題した展示を行う。これは「服を展示せず、機織り機で『0円紙幣(zero written note)～』を作っている動物の剝製のインスタレーションで構